

～セピア色の風景～

青田 茂雄
仙台建設業協会専務理事

「おかいこさん③」

蚕（かいこ）は一度にみんな透き通るわけではないため、順に選別していきます。選ばれた蚕を次の作業の所に運ぶのが、子どもの仕事でした。二階からの運搬は、床をくり抜いた四角の穴を通して、つるされた籠の往復で行されました。

次に一定の大きさの繭（まゆ）づくりに誘導するため、碁盤の目状（正確には、長方形）の回転まぶしというボール紙製の枠に這（は）わせます。蚕は、その枠の中に入り、口から吐く糸で外側から内側へ楕円形の繭を作つていきます。蚕がどんどん小さくなり、吐く糸が重なり真っ白となり見えなくなります。そして蚕は蛹（さなぎ）になります。2～3日だつたでしようか、繭が固くなると収穫です。回転まぶしから繭を取り出し、周りに付いている「けば」

を機械で転がしながら取り除きます。そして、その繭を出します。繭の中には、たまに蚕2匹が入つてしまい、形がいびつで固いものが出来上がります。これを「親繭（おやまゆ）」といいます。

親繭は、商品価値が低いため取り除いて自家用にします。自家用とは、真綿にするのです。親繭を茹（ゆ）でて蛹を取り除き、繭をぬるま湯の中でゆつくり引き伸ばします。そして、四角の木枠の四方にくくり付けます。何個かの繭を重ねた後、四角状のまま天日乾燥させます。これが真綿です。

真綿は、薄くはがしながらさらに伸ばし、布団や綿入れ半纏（はんてん）を作る際、布側に貼り付け綿と布のズレ止めに利用したのです。

戦後、和装から洋装への転

きます。そして、その繭を出します。

繭の中には、たまに蚕2匹が入つてしまい、形がいびつで固いものが出来上がります。これを「親繭（おやまゆ）」といいます。

大量の蚕が桑の葉を食（は）む音は、雨音のようでした。毎回聞きながらも、思わず外は雨かと、戸を開けることがしばしばでした。

いすれ蛾（ガ）となり飛び立つことを夢見ながら、頭を上下に動かし必死に桑の葉を食む姿と、雨降りに似た音風景は、斜陽となつた養蚕業とともに今、セピア色になりつつあります。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。16年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める